
BULE SKIES

kimra

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B U L E S K I E S

【Nコード】

N 1 1 3 9 W

【作者名】

k i m r a

【あらすじ】

少年たちは旅をしている。枯れた大地と灰色の空の下、今は失われたという青い空を探す旅。

涼にはタイムリミットがある。健斗には目的がある。二人は旅を続ける。

果たして、彼らの旅はどんな終着点を迎えるのか……

『プロローグ』モノクロの世界

青い空があった

確かにそこにあった

それはバカみたいに青くて

涙が出るくらい美しい

青い空があった

僕らの知らない

空

二人の少年が歩いていた。

暗く灰色の空の下。舗装の行き届いてないさびれた道。コンクリートがあちこち割れている。

「おい、健斗^{けんとう}。ちゃきちゃき歩けよ」

栗色の髪をした少年が後ろを歩いていた少年に話しかける。短く髪を刈り上げている健斗は、大きなスポーツバッグを引きずりながらだらだら歩いていた。

「涼^{りょう}……。オレはもうダメだ……。遠慮なく見捨てて……」

そう言うとは袈裟に膝をつき、そのままざらざらとした固い地面に横になる。

涼はしばらく彼を横目に見ていたが、何もなかったかのようにまた歩き出した。

「涼ー。腹が減ったー。せめて休憩しようぜー」

慌てて起き上がり追いかけながらブツブツ文句を言い続ける健斗

に、涼はため息をつきながら道端の石に座り込んだ。

「今日中に次の町に着きたいんだからな。少しだけだぞ」

「やったー」

意気揚々と地面に寝転がり、その状態のまま硬そうなパンにかじりつく健斗を一瞥し、涼は空を見上げた。

そこには空があつた。灰色をしたモノクロの。

彼らは色のある空を見たことがなかった。それは遠い昔の大戦で失われたと歴史の教科書などにも書かれている。それが当たり前の世界。

「青い空ってホントにあるのかねえ」

健斗が口をもぐもぐさせながら呟く。涼はそれには答えなかった。彼の中にその答えがないからだ。

「あの…」

不意に声をかけられ、彼らは後ろを振り返った。そこには背の高いすらりとした女性が立っていた。腰にはウエストポーチを着けている。

「種を植えて頂けませんか？」

「もちろん植えます。オレは困ってる女性の味方ですから！」

先程まで地面に寝ていた健斗は飛び起きてその女の手を握る。涼はあきれた。

「あの…えっと…、いくらですか？」

涼のその問いに彼女は苦笑し、ゆるりと首を振った。

「売ってるわけじゃないから…」

そして少し遠くを見るように目を細めてこう言った。彼女の目の前には枯れた大地が広がっている。

「ただ…、緑の草原が見ただけだから」

緑の森も草原もかつての大戦で失われたもののひとつだ。

彼女は植物の研究を個人でしていて、死に果てた大地でも育つ種を

実験的に配っているらしい。

彼女は大切な宝物を扱うように、小さな袋に入った種を差し出した。涼はそれを同じように丁寧に受け取った。

「大丈夫！オレが責任もって埋めますから！」

「埋めるってお前……」

小さく礼を繰り返しながら、遠くで待つ人影に向かって彼女は去っていった。

「恋人と二人旅なんて……。オレなんて男二人旅なのに……」

「お前……」

彼女は緑が見たいと言って、おれたちは青が見たいと言って、結局同じなんだ。

見たいのはこんなモノクロの世界じゃなくて。

「そろそろ行くぞ。健斗」

膝を抱えわざとらしく落ち込んでいる少年に声をかけると、涼はリュックを背負い直し歩き始めた。

「種……、埋めないの？」

健斗はゆっくりとした動作で起き上がり、前を足早に進む彼を追いかける。涼は掌の小さな袋を見つめた。この中には緑の草原の『可能性』がたくさん詰まっている。

「もう少し遠い場所に植えないと。ここは彼女が植えてるかもしれないし」

「成程。そうだね」

緑を増やす旅に出た彼女と同じように、彼らも旅をしていた。青い空を探す旅。

「よし！オレらも頑張ろー！」

健斗はスポーツバッグを肩にかけると走り出した。

「何をがんばるんだよ」

涼は歩く速度を少し上げ、その後を追う。前を走る黒いつなぎの

少年は、数分後には彼の後ろを歩いているだろう。いつものことだ。

たくさんの人に馬鹿にされ反対された青い空を探す旅。

その存在を肯定する言葉を彼らは持っていない。それでも進む。そんなのたいしたことじゃない。

掌に握られた小さな袋と同じように

彼らの中に『可能性』があるから。

必ずあるから。

くプロローグくモノクロの世界（後書き）

私は青い空、緑の森など自然が大好きです。それがなかったらやっぱり淋しいし、探してみたいと思うかも・・・。よろしければこの二人の旅を見守ってやって下さい（＾v＾）

夢を謳う

古びたホテルの廊下で少年が二人睨み合っている。栗色の髪をした少年、そして彼より少し背の低いくりくりした癬毛の少年。

睨み合う。

どちらもゆずる気はなさそうだ。

一日前。

「こんにちは」

少年二人は小さな古いホテルの狭いロビーにいた。カウンター越しにゆっくりした足取りでカールした髪の十四、五くらいの少年が現れた。

「で、何人？二人？」

「ああ、はい。泊まりますか」

栗色の髪をした細身の少年、涼りょうは丁寧に、しかしニコリともせず聞いた。その正面で対峙している癬毛の太壺たいちは台帳を投げてよこす。

「これに記入して」それを言い終わらないうちに奥から大声が響く。「太壺！ちゃんと愛想よくしなさい。どうせ学校にも行かないでやることもないんだから…。手伝いくらいちゃんとやりなさいよ。追いつくよ」

「うるせーな…」

太壺はさも不満そうに眉を寄せた。涼はその間に記入を済ませ、乱暴に差し出された鍵を受け取る。

「行くぞ、健斗けんと」

「はい」

後ろで成り行きを見守っていた少年は、素直にその言葉に従った。

その日の夕食を彼らはこのホテルの食堂でとっていた。食堂と言えるような広さもなく特別美味しい料理というわけではなかったが、二人は特に気にする様子もなく箸を運んでいく。

「あんたらどっか食いにいけば？ あんたらただだよ、ここで食ってんの」

迷惑そうに太壺が言った。その分仕事が増えるからだ。

「そんな金はない」

「涼はケチだからね」

健斗が焼き魚を骨のまま口に放り込みながら笑った。涼はというとすっかり箸をおき、残ったおかずを豪快に食事を続ける彼の方に押しやる。

「ってか、何のためにこんな町来たの？ 旅行ではないよな…」

母親のものなのか、赤と白のチェックという可愛らしいエプロンを身に着けた太壺は食べ終えた食器を次々重ね、お盆にのせていった。意外に手際がいい。

涼は少し考えた後、答えた。

「おれたちは旅をしてるんだ」

「旅？」

「ああ。で、情報を探してる」

涼は伺うように机の横に立つ彼を覗き込んだ。太壺は訝しげに眉をひそめる。

「何の、情報？」

「青い空の」

それを聞いた彼はきょとんとし、見つめる二人の少年それぞれに視線を送ると「はっ」と鼻で笑った。

「何それ。そんなの探して旅してるってこと？ 勉強嫌いの俺でも知

ってんよ。伝説とか空想の類っしょ、それ」

彼は見下したような視線を二人に向けた。それは被害妄想だったかもしれないが、椅子に座っている涼はそう感じた。

彼は立ち上がった。

「なんだよ……？」

太壱はたじろぎ、一步後ろに下がる。

「先に部屋に帰る」

「はい。オレは全部食べてからにするから」

「ああ」

涼は太壱に目もくれずドアから出て行った。

「なっ何だよ、あいつ。ムカつくわ」

彼は煤けた色をした癖毛の髪をガシガシかきむしると、皿の乗ったお盆を乱暴に掴み調理場に消えていった。

健斗はそんな様子を見送りながら、冷たくなっているパンを口に運んだ。

次の日の朝、涼は健斗の声で目を覚ました。薄目を開けて見るともう着替えを済ませ二段ベッドの上の階から降りてきているようだった。

「涼、朝ご飯食べに行くよ」

嬉しそうに狭い部屋ではしゃぐ。二段ベッドにイスが二つ置かれただけの部屋だった。ただひとつの窓も向きが悪いのか日差しが全く差し込んでこない。

「おれはいいよ。一人で行って来いよ」

「涼は食べなさ過ぎ。後で腹減ってもしんないからね」

「はいはい」

涼はむくりと起き上がると伸びをした。手が上のベッドに当たった。

彼はゆっくりベッドから降りると開いたドアからの光を頼りに、緩慢な動きで着替えを済ませ、本を一冊手に取る。何度も飽きることなく眺めた本。暇さえあれば見ていた。

明るいところで見ようーと涼は光を求め部屋を出て行った。

廊下は片側一面窓になっていた。日差しが差し込み眩しいくらいである。なんでこっち側を部屋にしなかったんだろうと涼は思った。廊下の壁に背中を預け、本を開こうとしたとき彼はやってきた。

「何してんの」

涼は構わず持っていた本を開く。太壺は物珍しそうに本を見つめた。

「何それ？ボロボロじゃん」

「見てわかるだろ。青い空の写真集だよ。言っとくけど貴重なものだからな」

「高いの？」

その問いに涼は呆れた顔をして目をふせた。金額じゃない。

「正直バカみたいだと思うけど。無駄な努力して」

涼は、寝癖なのかいつもより更にくりくりした頭の少年を一瞥して言った。

「無駄な努力すらしてない奴には言われたくないけど」

「はあ？」

太壺はむっとして本を捲る彼を睨む。涼は視線を上げて目を合わせた。

二人は睨み合うように向かい合った。

「おれたちに絡むのは年の近い奴と話したいからだろ。こんな早く起きてんのだって学校に行くか迷ったからじゃないの？」

「ば……っ、違ーよ！」

明らかに凶星のようだ。涼は少し考え、意を決したように聞いた。
「いじめられてんの？」

「ふざけんな。ただ二、三日サボったら行くタイミング掴めなくなっただけだ！」

苦々しくそう言い放つ太壺に涼は呆れ果てたようだ。ゆっくり瞬きをすると彼から写真集に目を移した。

「てめ…」

「涼ー」

険悪なムードにそぐわぬ明るい声が響く。健斗が満足そうな表情でこちらに向かってきていた。

「今日は何すんの？まだここにいるんでしょ」

「ああ。今日はもう少ししたらこの辺の人達に話聞いて、明日朝一で……っておい」

涼は油断していた。いや、油断してなくても虚をつかれただろう。健斗も小さな目を丸くしている。

「はは！ざまあみろ。これは俺が売ってやる」

太壺は奪い取った写真集を高く掲げ、廊下を走り出した。涼も弾かれたように後に続く。健斗も訳が分からず後を追った。

廊下には人がおらず、彼らは連なるように駆け抜ける。そして二人は入口の扉を飛び出していった。

「足、早いなあ…」

健斗は外に出たところで大分小さくなった人影を見ながら呟く。

朝食を食べ終えたばかりの彼はそのまま座り込んだ。

外は晴れていた。日差しがあると暑いくらいだ。黒いつなぎをただ脱ぎTシャツになると彼は空を見上げる。

「全然、大丈夫、だな」

爆走する二人はもうすっかり見えなくなっていた。

彼らは商店街を走っていた。寂れた雰囲気で半分の店はシャッター

ーが閉まっている。前を走る少年はもうすっかり息があがっていた。「マジ、かよ……」

後ろの少年はまだまだ余裕がありそう。これでは追いつかれるのも時間の問題だろう。

「いいかげんにしろよ。もう諦めて返せ」

涼が前を走る少年にどなる。太壺は苦々しい顔を見るとふいに口元をにやりと歪め、進行方向を急に変えると細い路地に入った。そこは日差しの届かない暗い路地だった。地元民にしかわからない抜け道なのだろう。

太壺は足元に雑多に置かれた様々な物達を器用に避けて進む。その時。

後ろで大きな音がした。太壺は振り返る。涼が派手に転んでいた。「ははっ、だっせえ」

彼は腹を抱えて笑った。そんな中、涼はスローモーションのようにゆっくり起き上がった。太壺は走り出す準備をして身構える。キレて更なるスピードで追ってくるんじゃないかと思った。

が、彼の予想は外れた。

涼はそのままゆっくり後ろに下がると商店街の道へと戻って行ったのだ。太壺はぽかんとその様子を見守っていたが、我に振り返り叫んだ。

「おい！いいのかよ。売っちゃもうぞ、おいってば」

慌てて元の道に戻ったが、彼はもう遥か向こうを歩いていた。

「涼、大丈夫かよ？」

「大丈夫だよ、これくらい」

健斗は心配そうに、ベッドに座り険しい顔をしている涼を見る。白いズボンの膝は赤く染まっており、顔のおでこの辺りにも血が滲んでいた。

「それより写真集だ。売ってた……」

涼は険しい顔を更にしかめた。あれは彼の宝物だった。ずっとずっと昔、小さな子供の時から。

「そんな悪いことするやつじゃないよ、きっと。オレが話してこようか？涼だとまた揉めるでしょ」

そう言って健斗がノブを回す。カタンとドアが何かに当たった。

「涼……」

涼は不思議そうにゆっくりと顔を上げた。それと同時に「じゃーん」と言って健斗が差し出したのは。

「これ……」

「涼の写真集だよ。オレの言った通りでしょ」

涼は手触りを確かめるようにそれに触れた。まぎれもなく彼のものだった。涼はゆっくりページを捲った。

「これもあるよ」

そう言って健斗は、彼の隣に年季の入ったくすんだ救急箱を置いた。涼はそれには目もくれずボロボロの青色の写真集を眺めていた。

次の日。

彼らは予定通り朝一で発つべく、荷造りをしていた。涼は準備を終え、ベッドに座っていたが上のベッドから小石やら紙やら木くずやらが落ちてくるのに気付き呆れ顔で立ち上がった。

「健斗、お前。またガラクタ拾ってきてるだろ」

「ガラクタじゃないよ。コレクションだよ」

そう言いながらベッドの上に広げた石などをスポーツバッグに入れていく。

「そんなだから重くてすぐ疲れんだろうが。捨ててこい」

「ええー」

健斗は不満げに顔を歪める。「昼抜きにするぞ」と睨まれて初めて彼はしぶしぶ頷いた。

「捨てるんじゃないからね。次来た時まで隠しとくだけだから」

「はいはい」

ポケットと両手いっぱいにはガラクタを持つと彼は出て行った。

「そろそろ出発すんのか？」

開いたドアから太壺が顔を出した。ちらりと涼を見たがおでこに貼られた絆創膏を見て、気まずそうに目をそらす。涼は彼の方をまっすぐ見て言った。

「怪我のことは別にいい。おれが勝手に転んだだけだ。でも、写真集を盗ったことだけは謝れよ」

その言葉に太壺は押し黙った。落ち着きなく目を泳がせ躊躇っている。そして暫くのち、意を決したように口を開いた。

「わ、悪かった。ゴメンナサイ」

涼は「ふん」と鼻で笑った。太壺は信じられないという表情を浮かべる。

「まさかとは思うけど…。お前…今、バカにしたろ」

涼は平然と言う。

「お前と同じことしただけだろ」

「はあ？俺が何したって…？」

ふと昨日の光景が浮かんだ。

食堂で彼らの夢をバカにしたこと。そうだ、鼻で笑った。

そして気付いた。

勇気を出して言ったことをバカにされるのはやっぱり腹立たしくて、傷つくのだ。

「……ごめん」

「わかればよろしい。あ、そうだ。救急箱どうも」

涼は丁寧なぺこりと頭を下げてそれを手渡した。それを受け取りながら太壺は少し迷いのある口調で聞いた。

「そういえば、情報はあったのか？」

「いや、これと言ってなかった。皆お前と同じ反応だったし。まあ、慣れてるし平気だけど」

太壺は少しの間逡巡し、「あんまり自信持つては言えないんだけど」と前置きをしてから言葉を繋げた。

「ここに泊まってた客が言ってたんだ。ここから、北にずっと行っただとこにある阿郷あごうってとこに首都から戻ってきた軍人がいるんだって。そういうやつならなんか知ってるんじゃないか？」

涼は咄嗟に立ち上がった。

「ほんとか」

「や、いや、記憶も曖昧だし、なんも知らない可能性のが高いと思うけどな」

太壺は涼の期待に満ちた瞳に言ったことを後悔しているようだった。頭を掻き視線を泳がせる。

「それでもいい。ありがとう」

涼は彼の方を向いてペコリと綺麗なお辞儀をした。

「たっだいまー」

健斗は軽い調子で部屋へ入ると、太壺が立ってるのを見て目を丸くした。そして交互に二人の顔を見まわす。

「またケンカしてんの？」

「してねーよ」

二人の声が重なった。そして一瞬のち、三人の笑い声が重なる。

「あ、そうだ。お母さんが怒ってたよ。今日は学校行くって言ってたんじゃないの。遅刻するよって」

健斗の言葉を聞いて太壺は慌てて時計を見る。「マジか」という言葉が唇から洩れた。

「学校、行くことにしたのか」

涼がベッドに座ったまま、慌てて部屋を飛び出そうとしている少年に聞いた。少年は照れ臭そうに唇を歪めると、言った。

「俺、夢とかもねーし。なんか目的つつつても、学校行く他やるこ

とが見当たんねーんだよ。まあ、無駄な努力だろうけどな」

「いいんじゃない」

涼はにっこり笑った。「じゃ」と言って太壺は大急ぎで走り去って行った。

「おれらも出発するか」

「はい」

涼が立ち上がるのと同時に健斗が幾分軽くなったスポーツバッグを手取る。

彼らは暗い部屋の扉を開け、足早に進んでいく。

青い空を探すための

これからも夢を謳い続けるための

そんな道を。

かけら（前編）

ねえほら　しっかり見つめてごらんよ
本当に大切なものは
かけらになんて　ないんだよ

じつとりとした空気が辺りを包んでいた。日差しが燦々と降り注ぎ、じりじり焦げ付きそうな、そんな形容の似合う光である。

「あつー」

健斗は腕にはめたリストバンドで額の汗をぬぐった。

少年たちは太壺たいちの情報を頼りに、数日をかけて昨日やつと阿郷あごうに到着していた。阿郷はそれほど大きな町ではなく、探し人はすぐに見つかった。

しかし、旅費のきれた彼らはバイトも兼ねてここにお世話になっているのだ。

「涼りようー。そろそろ休憩じゃないの？」

健斗は弱った顔で涼を見た。彼は目深にキャップを被り、黙々とシャベルで乾いた地面を掘っている。それを見て健斗は、短い髪を後ろに撫で付けると涼の掘った穴に木の苗を入れていく。
あちこちで同じ作業をしている男達がいた。

「よし、休憩だぞ。一時間後再開だ」

低い声が響いた。センターで髪を分けた無愛想な男が指示を出している。二十代後半、彼がここの責任者だ。

「やったー」

健斗は大喜びである女性のところへ駆け寄る。

「今日はサンドイッチだよー」

「わあい。ありがとうございます、真緒まおさん」

彼女はここを仕切っている会社の社長の娘さんだった。いつも昼食を差し入れてくれている。皆が彼女のもとへと集まっていた。

「やー、真緒さんて天才」

健斗は上機嫌でサンドイッチに噛り付く。帽子を目深にかぶり日差しを避けつつ、涼は周りを見回しながら健斗が運んできたそれを口に運んだ。汗がじわりと滲んでくる。

「一にしても、こんなところに苗木植えて育つのかね」

涼が呟く。忙しく食べ続ける彼は、同じように周りを見渡し言った。

「そりゃあ、国の研究所のお偉いさんの自信作なんですよ。っていうかりオの、なんじゃないの？」

「さあ、父さんの仕事のことはよくわかんないしな…」

涼は二つ目のサンドイッチに手を伸ばしながら首を傾げる。健斗はにっこり笑った。

「きつと、育つよ」

「うん」

少しでも色づけばいい、そう思いながら頷いた。

「うわっ」

大きな声が響いた。二人はそちらに目を移す。

「ちょっと躓^{つまづ}いただけだろ、放せ」

そこには真緒さんとこの責任者、ながたに永谷 ゆうぞう勇三がいた。

彼には片足が太腿の半分辺りから無かった。なので、杖を突いている。それが地面の凸凹に引っかかったようだ。

心配そうに支えようとする真緒さんを、彼は迷惑そうに振り払う。そして、自力で立ち上がった。

「なあ、あの二人ってさ…」

涼が呟いて横を見ると、健斗は悲痛な顔で彼を見返していた。

「っていうかお前は女なら誰でもいいのかよ。どーせなら奪うくらい心意気ないのかね」

そう言いながら涼は、サンドイッチの切れ端を口に放り込み右手の指輪をさわる。健斗は悲痛な表情のまま笑った。

「オレは人のモンを、奪ったりしないよ」

遠い目をして言う彼に涼は呆れた。

「昔おれのモン、パクってた奴の言葉とは思えねえな」

「またまたそんな昔の話」

健斗が大きな声を上げて笑った。そこへ「おい」と低い声が響く。

「そっち側、斜面急だから気をつけろよ」

「あ、はい」

永谷の言葉に二人は歯切れよく返事をした。

その日の夜。二人は永谷と共に近くの大衆食堂にいた。カウンタ―に三人並んで座る。

「へえー、青い空ねえ」

永谷はうすく割った酒を口に運びながら、涼の言葉を反芻した。

「笑ってもいいっすよ」

涼は薄く自嘲の笑みを浮かべた。永谷は首から垂れた長いボールチェーンを手繰り寄せ、その先に取り付けられた認識票に触れた。

「俺は元軍人で、首都の銀京ぎんけいにいたんだ。あっちは探すとかだけじゃなく、見たって奴もいたし…」

「どこで?!」

「知らねーよ。興味なかったし。銀京で直接聞けよ」

彼はのけ反って二人を静止する。

「そうですか…」

「ああ、悪いな」

永谷は心を落ち着けるようにコップに口を付けた。

「あれー」

入口から長身の男が向かってきた。永谷の顔色が変わる。男は永谷と涼の間に割って入ってきた。

「落ちぶれ軍人の永谷君じゃないの」

彼はグイと長いボールチェーンを引っ張った。それと共に永谷はつんのめる。片足のない彼は不安定に揺れた。

「いつまでもこんなもんぶら下げてるなよ。未練がましいやつだよ、本当」

「さわんなよ、クズが」

男の顔が怒りに歪む。と同時に永谷は、椅子から後ろに転がり落ちていた。

「永谷さん」

健斗が慌てて駆け寄り、上半身を支えた。

「お前が半身の屑だろ。見下してんじゃねーよ」

男は倒れた永谷を見下ろした。涼がその間に入り睨みつける。

「帰れ」

「な、何だよ。お前は」

「帰れ」

涼と男は睨み合った。そして数分後、男は諦めたように「ふん」と鼻を鳴らし、立ち去って行った。

「大丈夫か。永谷さん」

「ああ」

永谷はゆっくりとした動作で椅子に座り直し、遠い目をしながら口を開いた。

「情けねえな」

二人は立ち上がったまま彼を見る。

「昔はあんな奴なんかに負けない自信があった。夢を持ってる俺に絡んでくる奴らなんか蹴散らしてやった。軍にいたころも俺には誇

りがあつたんだ。…なのに」

永谷は自嘲するように口を歪めた。

「今は、なにもない。…何も」

何も見ていないような空虚な目をしてそう語る彼を、二人はただじつと見つめた。そして涼は小さくひとつ息を吐くと、入口へ体を向け「帰る」と呟いた。永谷は顔をゆっくり上げる。

「悪かったな。嫌な気分になんて」

涼は立ち止った。

「永谷さん」

永谷は涼の後姿に目を移す。彼は振り返らなかった。

「体が欠けたら人生終わり、みたいな言い方は、二度としないでください」

そのまま涼は振り返らず歩き始めた。

「涼。気をつけろよ」

健斗のその言葉に小さく頷いて、涼は出て行った。

健斗が戻ってきたのはそれから数時間後だった。バイト先の寮。ベッドが二つとユニットバスがあるだけの部屋だった。

その時、涼は薄暗い洗面台の前にいた。陽気な少年の帰宅にゆっくりとその部屋を出る。

「ただいまー」

「おかえり。永谷さん怒ってたか？」

「いや」

健斗は間をおいて続けた。

「泣いてた」

それを聞いて涼は驚き、同情するように「それは大変だったな」と言った。永谷は泣き上戸だったようだ。

「悪かったな。お前、軍人嫌いなのに」

そう続けた涼に健斗は彼の背中をバンバンと叩いた。

「いてっ」

「はいはい。そんな変な気使わなくていいから寝た寝た。それに、あんな永谷さん見れたオレの方がお得だったよ」

にやりと笑って彼は欠伸をひとつすると、浴室へと向かっていく。そんな健斗を一瞥しベッドにごろりと横になると、涼はゆっくり目を閉じた。

そして、あっという間に眠りに堕ちていった。

かけら（後編）

その日も暑い日だった。健斗は相変わらず、泣き言を繰り返しながら働いている。涼の姿はない。

「ふー」

涼は少し離れた建物の陰にいた。壁に沿ってズルズルと座り込むと、被っていたキャップがずれ、ぽとりと足の上に落ちた。その時。「こら、さぼりかつ」

その声にびっくりと体を震わすと、慌ててキャップを被り直す。現れたのは真緒さんだった。

「ごめん。びっくりした？　…でも、森江^{もりえ}くんがサボるなんて意外だわ」

彼女は悪戯っ子のように笑った。涼はゆっくり体を起こす。

「いえ、頭痛くて…、すいません」

「えっ、平気？　葉いる？」

真緒さんは彼の隣に今日の差し入れであろうカバンを置くと、ゴソゴソ探り始める。

「すみません。でも、葉は…もういいです」

そう言って立ち上がりとする涼に、真緒はカバンをポンポン叩き横になるよう促した。そしてその隣に腰を下ろす。

「ダメなときはちゃんと言いなよ？　勇ちゃんは厳しいけど、わかってくれるよ」

「ありがとうございます」

涼はゆっくりとした動作で、カバンを枕に横たわった。

健斗はシャベルで地面を少し掘っては休み、を繰り返していた。

「健斗。涼はどうした」

永谷は鍔の浮いたパイプ椅子に座りながら聞いた。汗をリストバ

ンドでグイと拭くと、健斗は彼の方を振り返る。

「さ、さあー。おトイレじゃないすか。そんなことより、永谷さん。その辺危ないんじゃないですか」

彼が座っているのは、先日斜面が急だと言われた辺りだ。杭を打ってロープが張ってある。

「大丈夫。よろけて落ちたりしねえよ。そんなことより」

永谷が健斗を見る。少年はにっこり笑って穴を掘り始めた。

「勇ちゃんね。私の近所に住んでる無愛想なお兄ちゃんだったの」
涼はゆっくり顔に置いていたキャップをずらし、真緒を見た。彼女は記憶を辿るように斜め上を見上げている。

「いっつも難しい顔して勉強してて、みんな近寄りがたいって言うてた。でも」

彼女はクスリと笑った。

「七歳の時だったかな。道で勇ちゃんに派手にぶつかったの。勇ちゃんは本ぶちまけちゃうし、あたしは転んちゃうし」

「へえ、どうなったんですか」

涼は起き上がって真緒を見た。随分楽になったような気がする。

「怖い人のイメージあったから、あたし大分ビビって。その後ね、勇ちゃんの本慌てて拾って謝ったら、笑って言ってくれたの。『物より、人だろ』って」

真緒は満面の笑みを浮かべた。本当に嬉しそうに。

「へえ…」

「なんだか反応薄いなー」

真緒さんは不満そうに膨れた。涼は「すみません」と頭を下げる。感情を大袈裟に表現するのは苦手だ。

「まあ、いや。それからはずっかり懷いてびっくりされたなあ。

上京する時は泣いて暴れたし」

「永谷さんのことずっと好きなんですネ」

涼は右手の指輪に触れた。少し古びた指輪だった。真緒さんは少し照れたようにポニーテールの髪先に触れて言った。

「だから今は、側に入れてすごく幸せ」

太陽はじりじりと地面を照らしていた。健斗はシャベルの柄に手をつけてその上に顎を乗せ、ただ昼休憩を待ちわびていた。今日の差し入れのことを考えていた。

「なあ…健斗…」

その彼に低い声が投げかけられた。少年はギクリとしてそちらを見る。

「三十分も籠るなんて涼はトイレの何なんだろうねえ…」

永谷は引きつった笑いを浮かべていた。健斗は一步後ろに飛び退くと、「見てきます」と言って駆け出そうとした。

永谷は「待て」と言って慌てて杖を持ち、立ち上がろうとする。その時運悪く、彼の首のボールチェーンに、後ろの杭の小枝が引っかかった。

プチン。

小さな音がしてチェーンが切れる。そのまま滑り落ちるように斜面の方に消えていく。

永谷は素早く振り返ると、手を伸ばす。必死で。軍にいた。懸命に頑張った。

それだけが唯一の誇りだった。

もう、それしかないんだ。

涼が現場に戻った時、そこは騒然としていた。不思議そうに人だかりに近づく。そして健斗を見つけて声をかけた。

「どうした？」

「それが、永谷さんが…」

苦虫を噛み潰したような顔の彼の視線を辿る。それは崖とも呼べるであろう、急斜面のほうへ向かっていた。

涼は慌てて腰の辺りまで張られたロープへ駆け寄る。

「永谷さん」

彼はそこにいた。急斜面の小さな出っ張りになんとかしがみ付いていた。

「よし、下りて助けるぞ」

古い従業員の男が、そう言ってロープを体に巻き始める。それを少年が奪い取った。

「おれに行かせてください」

「涼」

健斗が心配そうに瞳を揺らした。

「何言ってるんだ、バカ。バイトに行かせられるか」

「永谷さんにここで終わりにされたら困るんです。お願いします」

「はあ？ お前何を…」

少年は目深に被っていたキャップをとり、深々と頭を下げた。決心は固そうだった。

「おい、やばいぞ。早くしないと」

下を見ていた青年が焦った声を出す。みんながそちらに注目している隙に、涼は素早く体にロープを結びつけた。何を言っても無駄そうだ。

「涼、気をつけろよ。永谷を頼むぞ」

「はい」

キャップを被り直し、彼は深く頷いた。

涼はゆっくり、慎重にその斜面を下りていった。パラパラと小石が転がる。

十数メートル先に苦悶の表情を浮かべた永谷がいた。

「永谷さん、大丈夫ですか」

その問いに彼はちらりと上を見た。

「涼…」

「右手、怪我してるんですか」

涼は不思議に思った。永谷はなぜか片手でしがみ付いていたのだ。

「いや…」

「じゃあ…、もう少し下がります。おれの背中におぶさって、両手でしっかり掴まって下さい。できますか？」

涼は慎重に永谷の横に下がっていった。そんな彼に、永谷は静かに首を振った。

「何してるの」

いつもならそろそろ休憩の時間だった。しかし彼らはいつもと違い、真緒の到着を待ち望んではいなかった。彼女は騒ぎの中心へ歩み寄る。

「嫌だ」

低い声が響いた。聞きなれた声。真緒は駆け寄って崖下を見た。血の気がざあっと引いた。

涼は限界を迎え、ずるりと落ちかけた永谷の左腕を間一髪なんとか掴んでいた。担ぐことはできないかと思ったが、協力なしではとてもできそうにない。上からざわめきが降りてくる。

「あの…、おれには冗談は通じませんよ。上で健斗に言うてください」

「ダメだ…。そんなことしたら…、ドグダグが落ちちまう…」

よく見たら彼は右手に認識票を握っていた。少しずつ汗で滑り、今にも落ちそうである。

「だから…、もういいよ」

永谷の顔は涼の方を向いていた。けれど目はどこか遠くを見ている。涼は顔を曇らせた。

「でっ」

涼は驚いて手に力を込める。衝撃は永谷にあった。靴が直撃したのだ。

靴を投げた本人が怒鳴りつける。女性の声。真緒さんだ。周りにいた誰もが啞然としていた。

「ふざっけんな、バカ。もういいって何？ドツグタグそんなものが命より大事かよ。勇ちゃんが地雷の暴発に巻き込まれたって聞いた時、どれだけ心配したかわかる？生きてるって連絡きたとき、どれだけ嬉しかったか……。わかるでしょ……。だって」

真緒さんの目から大粒の涙が溢れる。ぽろぽろぽろ、とめどなく。

「物より人だって…、そう言ってくれたじゃない」

彼女は地面に崩れ落ちた。地面にしみが次々できていく。

永谷は何も言わなかった。涼は一瞬呆れた表情を浮かべ、そして独り言のように呟いた。

「じゃあ、死ねよ」

一瞬、世界が凍りつく。彼は続けた。

「あなたを見てると、昔の自分を見てるようで、イライラする」

記憶が鮮明に蘇ってくる。彼も昔、体が欠けたら死ぬって泣いたのだ。

「涼…？お前、何」

永谷は涼を見る。汗だくの少年は眉を寄せ、苦痛の表情を浮かべている。腕が痺れはじめていた。

彼は大きく一息を吐いて言葉を繋げた。

「おれの目は、少しずつダメになって、そのうちほとんど見えなくなります」

誰も一瞬言葉の意味を理解できなかった。暗い目で崖下の二人を見つめる健斗以外は。永谷はぽかんと涼を見上げていた。

涼は苦しそうに顔を歪めながら、薄く笑った。

「だからあなたの言葉を聞くと、どんどん未来が絶望していくんで

す。勝手な話だけど、生きて、未来は楽しい、そう言ってほしいんです」

そこまで言ったとき、永谷の体がガクンと揺れた。真緒の悲鳴が響く。涼の手が一瞬緩んでしまった。

ガラガラと石が転がり落ちていく。その中に、キラリと光る物が、あった。

「涼…、早く引き上げろ」

永谷は涼の腕を掴んでいた。右手で。しっかりと。

そして、何とか彼により登る。

上に登った時彼らはもうクタクタになっていた。そんな二人にみんなが駆け寄る。真緒は泣きながら永谷に抱き付いた。

みんながそれぞれに各々の言葉を口にした。怒声だったり涙声だったり。けれど誰もが彼の生還を喜んでいる。

誰もが汗びっしょりだったが、気にする者は誰もいなかった。

暑い日が続いている。今日も変わらず男たちは、その日差しの中働いていた。しかし、二人の姿はない。

彼らはプレハブの事務所にいた。

「ほい、ご苦労様」

永谷は封筒を差し出した。

「ちよっとイロつけといたから」

「ええっ、ありがとうございます」

涼は目を輝かせ、百点満点のお辞儀をする。それにつられて、健斗も軽く頭を下げる。「あ、ああ…」と永谷は困惑した表情を浮かべた。

「涼…」

涼はゆっくり体を起こす。永谷は視線を下げたまま、やんわり微笑んだ。

「今はまだ楽しいとか胸張って言えないけど、何もないなんて、もう絶対言わないから」

涼はにっこりと笑った。それを見て健斗も笑う。彼らはペコリと頭を下げると旅立っていった。

どこか欠けても 君は君だよ

大切なものは

今も 君の中に ちゃんとあるから

クロイセカイ

あの頃の おれは
闇よりも濃い

クロイ

クロイセカイの中にいた

少年たちはとある駅の前にいた。

「ねえ、涼^{りょう}。どこまで行くの？」

頭の後ろを刈り上げている短髪の少年は、路線図を見上げ後ろを振り返った。声をかけられた栗色の髪の少年は、背中に背負ったバックパックから白い封筒を取り出す。

この前、永谷の所でもらったバイト代だ。

「そうだな。とりあえず銀京^{ぎんけい}に向けて行けるとこまで行って…」

そう言いながら封筒を探っていた彼は、「あれ？」と怪訝そうに首を傾げる。そこには小さな紙が入っていた。

「西へ行く列車。そろそろ来そうだよ」

その言葉に涼は取り出そうとしていた紙切れを元に戻し、切符売り場に足向ける。健斗^{けんと}は後に続いた。

「ねえ、涼。腹減ったー。なんか食べ物買い込んでこうよ」

「時間ないって言ってるだろ。ほら、これ」

涼は手もつけない朝食のパンと硬いビスケットを取り出す。健斗は大喜びで「わーい」と無邪気に声を上げ、それを受け取ると次の瞬間には噛り付いていた。

涼はそれを黙って眺める。

「何？ あげないよ」

「いらねーよ」

記憶の片隅の何かが引つかかる。あれはまだ健斗にも出会っていない頃。
幼い少年の記憶。

十年前。小さな田舎の学校。
チャイムが鳴って教室が一気にざわめき始めた。涼はあたふたと白い割烹着に袖を通す。

「今日はパン係だ…」

彼は壁の表を確認すると、同じように白い衣服に身を纏った少年の後を追って教室を出ていった。

この学校では週三回の頻度で給食が支給されていた。近くのセーターから出来上がった料理が運ばれてくる。それを決められた当番の彼らが配膳することになっていた。

次々お盆にお皿を乗せた子供達が、並んで料理を受け取っていく。しかし、皆パンだけは受け取らず避けるように席へ戻っていった。

「あ、あの。パン…」

涼は必死に声をあげた。でも。

「おれ、今日パンいらない」

「わたしもー」

「あっ、あたしも」

みんなそれぞれ呟きながら、わらわらと散っていく。そこへ騒ぎを聞きつけた担任の教師が入ってきた。

「どうしたの。何の騒ぎ？」

散った子供達がそちらへ集まっていく。

「だってあいつが当番やってるんだもん」

そばかすのある少年が、仏頂面で教師を見上げて訴える。

「おれ、かあちゃんに言われた。目のびょうき、うつるから近づいたらダメよって」

それに賛同して、あちこちから一斉に声が飛び交う。涼は俯いて唇をぎゅっと噛みしめると、顔を上げた。

「大丈夫、だよ？ パパもママもへいきだし、うつらないって言うってたもん」

精一杯、笑う。

ざわめきは止まらなかった。

「はい、静かに。とりあえず座りましょう」

先生がパンパンと手を叩く。子供達は渋々、各々の席へと散っていった。

この町に引っ越して三ヶ月。

こんな出来事は度々起きていた。彼の病気を教師すらよく知らない。ここでは彼の病気に對する理解は全くといってなかった。

「ただいま」

緑色の屋根の広い家。大きな庭は綺麗に管理されている。その家の硬い木のドアを涼は開けた。

「おかえり」

色素の薄い亜麻色の髪の女性が彼を出迎えた。右目の下に黒子がある。彼の母親の流^る香だ。

「どう？ 学校」

「……え」

彼女は優しい微笑みを浮かべて、靴を脱ぐ涼の後ろにしゃがんだ。彼は脱いだ靴をきちんと揃えると、くるりと振り返りにっこりと笑う。

「うん。たのしいよ」

それだけ言うとカバンを置くため部屋へと急ぐ。そんな少年を、流香は少し複雑な気持ちで見つめた。

「涼が？」

明るい栗色の髪に奥二重の瞳。アヒル口。ネクタイを外しながら涼の父、リオは首を傾げた。

「うん…、何も言わないけど…なんとなく変なの…。どうし…」

流香は思いつめて今にも泣き出しそうだ。

「でりゃ」

「いたっ」

急にデコピンをされた流香は不満そうにリオを睨みつける。そして逆襲とばかりに頭突きを食らわせると、革張りのソファに座り込んだ。

「私は真面目に言ってるの。これ以上涼に何かあったら、私は…」

「流香さん」

リオは薄く笑うと流香の肩にそっと手を置いた。

「涼の病気は流香さんのせいなんかじゃないよ。原因はまだ解明されてないんだから」

「でも」

流香は責めていた。自分を。何か防ぐ方法があったんじゃないか。何か、もっと。

彼女は泣いていた。

涼のために何かしたい。何でもするのに。

「流香さん、大丈夫だよ。大丈夫」

リオは膝をつき、彼女を抱きしめた。

その時、涼は部屋の学習机の前に座っていた。机の上には一枚の写真。病気がわかる前の家族三人の笑顔。

涼はそれを真っ直ぐ見つめたまま、ぎゅっと手を握る。

ママが泣いてる。
もつとがんばらなきゃ、もつと。
彼は深く頷いた。

低い雲。いつもの灰色の空。涼はゆっくり玄関のドアを開ける。
流香がそれに続くように飛び出してきた。

「涼、暗くなる前に帰ってね。必ずよ」

「うん、わかってる」

彼女は涼の病気が解って以来、すっかり過保護になっていた。本当は涼を出かけさせることも怖がっているくらいだ。

涼は近くの公園へと向かった。ここで今日遊ぶと少年たちが話しているのを聞いたのだ。

はやく友だちをつくる。そうすれば安心させられる。そのためにもつとがんばる。そう思っていた。

「あれえ」

涼は辺りを見回す。そこには少数の遊具があつたが、子供の姿はないように見えた。

その時、大きな石の滑り台の向こう側に隠れていた少年と目が合った。そばかすで垂れ目の少年だ。青い野球帽を被っている。

涼はいつもの何倍も重く感じる足に力を込め、やっとの一歩を踏み出した。

「あの…」

声がうわずる。涼はゆっくり呼吸をひとつした。

「ぼくをなかまに入れて。めいわく、かけないようにするから。いっぱい、いっぱい、がんばるから…」

滑り台の向こうに子供は四人いた。そのうちの一人、ふわふわした髪のが愛らしい女の子が口を開いた。

「入れてあげようよ」

「バツカちゃん、みやび。目、見えなくなりたいのかよ」

そばかすの少年が猛反対する。ほかの二人も頷いた。

「やだ…、やだけど。でもかわいそうだよ。はなれて遊べばいいんじゃない…」

「そんなの、なかまじゃねえ」

そう言い放つとそばかすの少年はすつくと立ち上がる。そして三人を見下ろして言った。

「とにかくここを脱出する」

石の陰から少年が飛び出してきた。涼は慌てて駆け寄ろうと歩を進める。その瞬間。

バシッとこめかみに痛みを感じた。何が起きたのか理解できなかった。

「今だ、にげろ」

少年の声。

「ほら、みやびちゃん行こう」

少女の声。

そして、走り去る四人の足音。ポーンと地面を跳ねるゴムボールを見て、それが頭に当たったんだと気付く。

彼は長い間、一步もその場所を動けなかった。

その夜、涼はクロイくれよんを握った。それを家族の写真の自分に擦りつける。

たちまち彼はクロク塗りつぶされていった。

そう、まるで、彼の心のように。

それから涼は学校に通った。日に日に重くなる足を必死に前に運んだ。変化のない日々。

しかし転機はやってきた。

目が覚めると涼は保健室にいた。ふかふかの白いベッド。彼はゆっくり起き上がる。白衣を着た養護教諭が近づいてきた。

「大丈夫？ 君、教室で倒れたのよ」

「あ」

記憶が繋がる。

涼は今日も給食の当番をやろうとし、彼がやると食べれないからと割烹着の取り合いになり、転んでしまったのだ。

「涼くん」

涼は養護教諭の呼ぶ声に、うつろな瞳を向けた。差し出されたのは、白に赤い花柄の模様のハンカチだった。

「何？」

「手当してる時にね。ともだちが貸してくれたの。返しておいてね」
「ともだち、ぼくの？」

涼はそうっと丁寧にそのハンカチを受け取った。『しのたに みやび』とピンクの糸で刺繍されている。白い色がなぜか眩しく思えた。

「あ、それと念のためご両親にも連絡したから今日は早退して…」
その時ガラリと扉が開いた。そこにはリオと流香が二人揃って立っていた。

「涼、大丈夫？」

「どこだ、どこを打った？」

二人は涼に駆け寄る。養護教諭が簡単に説明をした。

「軽い脳震盪だとは思いますが、念のため…」

「頭か？ 痛いかな？ 安心しろ。パパが優秀な医者を…ぎゃわっ」

「黙りなさい」の言葉と共にリオに拳骨が落ちた。流香は「どうぞ」と続きを促す。殴られた本人のリオは照れたように満面の笑みを浮かべていた。

「ママ…」

涼はベッドからゆっくり降りると、流香にハンカチを差し出した。

「これ…、返すから、せんたくして」

困ったように見上げる涼に、彼女は少し戸惑った表情を見せた後、しゃがみハンカチを両手で受け取ると微笑んだ。

「そうね。ママにまかせなさい」

「うん」

涼は天使のように笑った。

その夜。涼が風呂から上がった時、なぜか流香が思いつめた顔で立っていた。

「ママ？」

涼は不思議そうに首を傾げ、彼女が持っているものを見て言葉を失った。

それは写真だった。リオと流香とクロク塗りつぶされた、涼。

「涼、どうしてこんなことしたの。お願いだから、ママに話してね、できる？」

涼はうなだれて震えながら、ぽつりと、呟いた。小さな声は、辛うじて流香に届いた。

彼女は小さな少年を強く抱きしめる。流香は泣いていた。

涼は、まだがんばれるよと心で呟き小さな拳を握りしめた。

狭い部屋。その部屋の長方形の机を挟み、担任の教師と涼の両親は向かい合っていた。

「涼の病気は、感染しません」

そう言いながら、リオは解りやすくまとめられたファイルを差し出した。担任はそれを一瞥すると、彼らの方に向き直る。眼鏡の奥の瞳が戸惑っていた。リオは姿勢を正したまま、話を続ける。

「原因や治療法はまだはっきりと確立してません。百パーセント解

ってもらわなくてもいいんです。知る努力をしてもらえませんか」
「お願いします」

静かに話の成り行きを見守っていた流香が、いきなり立ち上がったことに教師だけでなく隣に座っていたリオさえも面食らった。

流香は深く深く頭を下げていた。

「あの子……。言っただんです。『自分の事いらない』って」
クロク塗りつぶされた写真。

「『自分は、いないほうがいい』って」
「流香さん」

リオは表情を曇らせると、流香の背中にそっと手を添えた。彼女は頭を上げなかった。窓から差し込む夕日に染められた部屋で、三人は暫く沈黙した。

生徒もまばらな古びた廊下。少年と少女は向かい合って立っていた。

「なんで？」

涼は、綺麗にシワを伸ばされたハンカチを少女に差し出していた。このハンカチの持ち主、『しのたに みやび』。ふわふわの髪に大きな瞳の少女。

「いらなくて、なんで？」

涼は憂いを帯びた瞳で再度言った。みやびは戸惑いを隠せない表情で、差し出されたハンカチをじっと見つめている。彼女のお気に入りの白地に花柄の可愛い模様。

「ちゃんとせんとくして……」

涼は一步踏み出して、それを手渡そうとした。

「さわらないでっ」

彼女自身も驚くような大声だった。はっとして目の前の少年を見る。

彼は大きく瞳を見開いて、固まっていた。傷ついた瞳。みやびは怯

えたようにゆっくり後ずさると、駆け出していった。

少しずつ足音が遠ざかる。そして、それを待っていたかのように静寂が訪れた。

涼は人形のようにただそこにいた。

ぼとりとハンカチが艶のない廊下に落ちる。後を追うように水滴がパタパタ音を鳴らした。

「ママ、ごめんなさい…。ぼくもう、がんばれない」

涙が止め処なく溢れてきた。両腕で顔を覆う。

クロイセカイがそこにあった。

「…おっしゃることはわかります」

夕暮れの応接室で、銀縁の眼鏡をかけた涼の担任は戸惑った様子で口を開いた。神経質そうに眼鏡を押し上げる。

「でも、もしも、が心配なんです。ほかの子供達には、将来がありますし…」

「なっ」

「もう、いいです」

反論しようとしたリオを遮り、流香は低い声で言うど相手を睨みつけた。氷のようなまなざしだった。

リオはそんな彼女を、心酔したように見つめる。

「リオ、帰るわよ」

「ハイっ」

流香はすっかり凍りついている教師を置いて、扉へ向かった。リオが後を追う。

その時ガラリと扉が開いた。

「涼…」

扉に向かっていた二人は、その少年の様子に不思議な違和感を感じ

じた。

「パパ、ママ」

涼は見ているようで見ていない、そんな空ろな目を彼らに向ける。そしてすっかりした口調ではっきり言いきった。

「ぼく、転校なんてしないよ」

誰も何も言えなかった。

『あいつら全員見返してやる』

そう決めた。

それが光に見えた。それを信じようと思った。

例えそれが、そんなに悲しい光であっても。

ガタンガタンと心地好い揺れに身を任せ、涼は浅い眠りを繰り返していた。遠い過去の夢を見た気がした。

「涼」

名前を呼ばれ寝ぼけまなこで見た先には、一枚のチラシを掲げ駆け寄ってくる健斗がいた。何が入っているのか、そのポケットは膨らんではち切れそうだ。

「お前、こんな場所で何拾ってきたんだよ」

窓枠に肘を置き手で頭を支えながら、涼は呆れ顔で欠伸をひとつした。

「拾ってないよ。列車探検してたら色んな人がくれたんだよ」

「そんなに」

「向こうでお腹すかした従兄弟が待ってるって言ったらいっぱいくれたんだ」

髪を刈り上げた賑やかな少年は、ポケットから様々な食べ物を取

り出しながら涼の向かいに腰を下ろす。

「従兄弟ではあるが、腹はすかしてない」

再び眠りに落ちようとする涼を、慌てて健斗が阻止した。

「ほら、これ見て。ねえ、ほらほらほら」

顔にグイグイと押し付けられるチラシを、栗色の髪をした少年は迷惑そうに受け取った。それは知らない街の祭りのものだった。

「この先の駅で乗り換えて、少し行ったところでやってるんだって。ねえ、行ってみようよ」

「無駄な金使って寄り道するわけないだろ」

少し考えれば予想できた答えだが、健斗は想像以上にしょんぼりした。涼から返されたチラシを、俯いたままじっと見つめている。涼は呆れたようにそれを眺めていたが、諦めたようにひとつ息をついた。

「少し、ただだぞ。その分バイトも頑張れよ」

「やったー」

黒いつなぎの少年は、大喜びで飛び上がった。頭を上棚にぶつけたが気にも止めていないようだ。

「静かにしろ」

「はい」

おとなしく席に着きチラシを凝視する少年を見て、薄く苦笑すると涼は目を閉じた。

遠い過去。

クロイセカイの底の底に落ちて、おれは過ごした。

そして、それから数年後。

かすかな

でも確かな光を見つけるんだけど

それは、また

別のお話。

傷をわらう

古い傷がある

忘れた頃に痛み出しては

僕を苦しめる

こんな傷

本当は

欲しくなんてなかった

陽気な音楽。カラフルな色の服の人々。子供たちがお揃いの衣装で駆け回る。

「わー、思ったより派手なお祭りだね」

黒いつなぎを着た少年、健斗^{けんと}は目を輝かせながら言った。彼の言うとおり、小さな街のお祭りにしては出店^{でみせ}の立ち並ぶ盛大なものだった。

「そうだな」

涼^{りょう}は白いつなぎのポケットに手を入れたまま、周りを見回し頷いた。珍しく落ち着きがないように見える。

健斗は荷物を置きに先に寄った宿でもらった小遣いを握りしめ、食べ物の屋台を一つ一つ覗いていく。それを横目に見ながら栗色の髪をした少年は、空を見上げた。空から洩れる光は明るい、強くもなく程よい温もりを与えていた。

色は相変わらず灰色をしていたが。

「それにしてもなんであんな派手なんだろうな」

「なんでだろうね」

周囲の人間みんな、染められたようなカラフルな色な服を着てい

る。健斗には、そんなものはもう目に入っていないようだ。ベシヤ。

その時、涼は足に冷たい感触を感じて視線を落とした。

「え、何」

そこには子供たちが集まっていた。一様に蛍光色の服を着た少年少女は、手に大きなハケを持っている。皆、楽しそうに笑っていた。「お兄ちゃん。そんな白い服着てたら、かっこの的だよ」

「なんで」

どんどん青色に染められていく白いつなぎに阻止する手立てもなく、彼は声をかけてきた飴玉を売っているおばさんに困ったように目を向けた。涼は子供が苦手だ。

「このお祭りは家内安全のためだけど、この辺を治めてる神様は派手好きらしくてね。昔から子供たちが道端にある絵の具を服にペイントするのが、祭礼なんだよ」

おばさんは他から何も知らないで来た少年が、おもしろいのかニヤニヤしながら教えてくれた。

彼の白いつなぎはすっかり染まっている。子供たちは納得したのが歓声を上げながら去っていった。

「お兄ちゃん、中々いいじゃないの」

青に白に赤。まるで青空と花みたいだと、彼は思った。もちろんそんな景色は見たことはないけれど。

涼は静かに微笑んだ。

彼はもう何年もお祭りなどに訪れたことがなかった。

小さな頃は両親に連れられ行っていたが、田舎に引越してからは友達もなく、お祭り先で同級生に会うのが嫌で行かなくなった。地元は夜のお祭りが中心だったのもある。

随分昔に失くしていた、胸がわくわくして落ち着かない気持ちを思い出した気がした。

「おい、健斗。お前は大丈夫、て、あれ」

もうすでにその言葉に答える少年はそこにはいなかった。

「まあ、いいか。宿知ってるし」

涼は姿勢を正し、胸を張ると歩き出した。

その頃、片割れの少年は立ちすくんでいた。

目は一点を見つめている。その視線の先には一人の男がいた。小柄な少し丸いシルエット。

「兄ちゃん、どうかしたんか」

鉄板焼きを手渡そうとしていた髭面の親爺が彼の視線を辿って、首を傾げた。

健斗は金縛りのようにピクリとも動かず、左胸を押さえたまま荒い呼吸をする。瞳が左右に揺れていた。

「おい、医者呼ぶか」

親爺が彼の肩を掴み、ビクリと体を震わせると健斗は視線をそちらに向ける。汗だくだった。

「え、何」

「大丈夫か。顔色悪いぞ。医者行くか」

「あ、平気、です」

健斗はにっこり笑って商品を受け取る。もう一度今しがた見ていた方向を見たが、男は消えていた。

彼が立ち止っていると、ビシヤリと足元に水の感触がした。

健斗のつなぎは元が黒いせいにかたくさん色がついているにも関わらず、思ったより染まっていけない。

「今度は白い色もってきたからな」

子供たちはわざわざ白色を運んできたようだ。道端には様々な色の入ったバケツが置いてあったが、この辺りに白い色はなかったらしい。

「負けないよ」

健斗はさっきもらった鉄板焼きをポケットに詰め込むと、おどけ

たように舌を出し走り出した。蛍光の服に身を纏った少年少女が後を追う。

時々、後ろを振り返りながら距離を取る健斗。夢中になって追いかける子供たち。

その追いかけてくる周りを人々が笑って見守っていた。

「ぎゃ」

その声に振り返ると一人の少年が膝を抱え、うずくまっていた。転んだようだ。

子供たちが彼の周りに集まっていく。健斗も慌ててその輪に加わった。

「大丈夫？」

少年は俯いている。膝を擦りむいていた。その時。

ザバーっと、しゃがんでいる健斗の頭から水が降ってきた。白い水。俯いていた少年が顔を上げた。

「こんなケガで泣くか。ひっかかったな」

少年は先程の健斗のように舌を出す、他の子供たちと跳ね回って遊ぶ。周りの大人は、全身ずぶ濡れの彼がさすがに怒りだすのではと心配して寄ってくる。でも、そんなのは杞憂だった。

健斗は笑っていた。そのまま子供たちとふざけて遊ぶ。

「ちゃんと手当しなよ。跡が残るよ」

「オトコはそんなの気にしないもんだぜ」

得意げに笑う少年に、健斗も声を上げて笑った。

彼が膝の傷を思い出す時、話す時、きっと笑っているんだろう。

でも、そんな傷ばかりじゃない。

足がすくんで、苦しくて怖くて憎い。そんな傷。

健斗は服の左胸の部分を強く握った。服が引っ張られてえりぐりが伸びる。

そこから罰点の傷が覗いた。

その日の夜。ゴトンゴトンと今にも壊れそうな音のする洗濯機の前には彼らはいた。

「なんかすごい祭りだったな。明日も行くんだろ」

Tシャツにクロップドパンツという格好に着替えた涼は、さっきまで全身真っ白になっていた少年に聞いた。今は大きな文字の入ったTシャツにカーゴパンツを穿いている。彼は大きな音を上げる洗濯機に目を落とし、黙っていた。

「さすがに絵の具ぶっかけられたのには参ったのか？」

「え」

のぞき込まれて初めて、彼は驚いたように涼を見る。そしてにっこり笑った。

「ごめん。音がでかくて聞こえなかった。何」

「いや、今日の祭りだったんだ」

「おもしろかったよ。子供ってテンション高くていいよね。涼は？」
子供が得意でない涼は困ったように首を傾げた。

「確かにお前と子供は気が合いそうだよな。おれは久々に祭りってもんに行ったけど、なんか楽しかったよ」

彼は嬉しそうに目を細めた。健斗は「よかったね」と笑って、少し考えてからこう言った。

「涼は思わないの。子供の頃、違ってたらって」

「は？」

「仲間外れにされてなければ、目がもう少しいいうちにいくらでも夜の祭りでも行けただろ」

涼は急にこんな話を始めた彼の心中が読めず、「はあ」とだけ言った。

「みんなの事恨んでないの？」

栗色の髪の少年は面食らった。大半の時間を笑っている健斗に真

面目な顔で、こんな質問をされたこともなかったから。

「恨んでないと言ったらウソだけど」

涼はまっすぐ健斗を見た。いつもと雰囲気の違いが、どこかいたたまれなかった。

「憎み続けるのは大変なんだよな。憎しみは重くて、ひきずるけど苦しくて辛くなる」

涼は眉を寄せた。

「だから、捨てた。少しずつ」

「許したってこと？」

健斗は子犬のような目をして首を傾げる。涼は口をへの字にして少し考えた後、腕を組んだ。

「許したってのもあるし、バカバカしくなったってのもあるかな。全部は無理だけど、随分軽くなった、気はする」

彼はゆるりと笑う。それを見て健斗はにっこり笑った。いつもの彼だ。

「よし。明日もお祭りだ。これ明日までに乾くかな」

「他のにしろ。また白絵の具かけられるぞ」

二人は騒々しい音を奏でる洗濯機を見つめた。

次の日もいい天気だった。昨日より日差しは強いが、温かいといえるくらいのものであった。昨日と同じように立ち並ぶ店。

違うのは蛍光色の子供たちがいないことぐらいだ。その代り、皆各々道端の絵の具で好きなデザインを自らに描いていた。

「なんだ。つまんない」

健斗は少し不満そうだったが、涼は正直ほっとしていた。今日も子供に囲まれたらどんな反応をしたらいいのか、正直悩んでいた。

「まあ、いいや。何食べようかな」

跳ねるように進んでいく。涼はその後をゆっくり追った。

その時、健斗の動きが止まった。視線の先には昨日の男。涼は同じように立ち止まった。

「決まったのか」

涼の声と同時に健斗は走り出していた。涼が呆気にとられているうちに、人ごみをすり抜けて消えていく。彼は戸惑いながら後を追った。

「わ、なにするんだっ」

脇道に入ったところで、左胸に大きな赤いバツ印を書かれ小男は驚きと同時に憤慨した。

高そうな素材のシャツ。赤い絵の具の塗られた部分にはブランド名か、刺繍がなされている。

するりとリストバンドをした少年の左手からバケツが落ちて、赤い色をまき散らした。

「オレの事おぼえてるか？」

小男は訝しげに少年を伺った。少し怯えているようだった。短い髪の少年は、えりぐりをグイと引っ張った。大きな古い罰点の傷。

「この傷つけたのあんただろ」

男は思い当たったようだ。そして少年が青い顔で怯えた目をしているのに気付き、薄く笑った。

「覚えてるよ。昔苛ついてた頃にその傷つけるのがブームでね。あの頃の孤児の一人か」

少年は歯を痛いくらい噛みしめた。とっくに塞がった胸の傷が、じくじくと痛む気がする。

今はその小男より大きく成長したはずなのに、負けないはずなのに、足が震えた。一步も動けない。

「なに、それでこれが復讐ってわけ？ この程度が？ しょばいね」男が一步一步近付いてくる。動けない。足元の赤い色が結界の様

だ。

「健斗」

名前を呼ばれ顔を上げたのと同時に、男が視界から消えた。

「何やってんだ、お前」

目の前に立つ、涼が呆れたように呟く。視線を移すと、道端に男が倒れていた。

「涼、今蹴った？」

「悪者っぽい顔でにやついてたから。違ったか」

涼は、何が起こったのかわからない様子で立ち上がる男を一瞥した。健斗は声を上げて笑った。

「違うない」

「ああ、そう。よかった」

「いいわけあるか。訴えるからな。お前ら……」

男は薄くなり始めた髪を整えながら少年たちに近付こうとしたが、ピタリと歩みを止めた。涼の顔を見て固まっていた。

「お前、リオさんの」

その言葉に涼は首を傾げる。彼はリオの面影が濃かったが、本人は自覚していなかった。

「リオはおれの父親だけど」

「やっぱりっ。あの人にはもう一生関わりたくない」

「なんで」

「こんな辺鄙なところに飛ばされたからだよ！」

小男は憤慨し、荒々しい足取りで住宅街の方へ歩いて行った。

「何だあれ」

涼は啞然としてその後姿を見送っている。健斗は嬉しそうに笑って、ぽつりと呟いた。

「憎しみって、一人きりじゃ捨てられないんだな」

「え」

栗色の髪の少年が振り返るのと同時に、彼は祭りの喧騒へと歩き出していた。軽い足取りだった。

「あー、お腹すいた。何食べよっかな」

「お前、ポケットに食い物入れるのやめろよ」

涼は呆れながらその後を追う。健斗は振り返るといつもの様に笑った。

傷はある

今もここにある

でも 進める

少し軽くなった体で

いつか笑って話せると

そう

信じていけるから

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1139w/>

BULE SKIES

2011年10月9日03時26分発行